

畏怖と感謝

日本は多くの自然に恵まれています、その分、脅威にも晒される国です。地球にはそれぞれの地域にそれぞれの自然があり、それを避けては通れません。2011年の東日本大震災、今年のトルコシリアの大震災では多くの方が犠牲になりましたが、その後も人々はその中で逞しく生きられています。東北もトルコシリアも古くからの巨大地震発生地帯です。東北では869年の貞観巨大地震があります。シリアのあの地域は十字軍の舞台でもあり、1096年の第1回十字軍遠征にも「十字軍将兵が地震と大雨に怯え、飢餓に苦しみ」という記載があり、1138年にM8.5の巨大地震がシリアのアレッポで発生し23万人が犠牲になっています。それでも人々がそこに住み続けるのは、自然や人々からの恵みも豊富だからです。

生き物も自然の産物であり、人工物ではありません。従いまして、病気も自然が作り出すものなのです。病気とは自然の脅威といってもいいでしょう。災害に備えるように、病気の脅威にも備える必要があります。突然襲われることもあれば、徐々に浸食されるように迫って来るものもあります。逆に、健康であるということは、自然の恵みを頂いていることなのです。

医療は災害対策と同じです。壊れたものを修復し、次の災害に備えるのです。治水事業と同じ、長い歴史があり、創意工夫し発展してきました。そこには副作用や合併症も起こります。しかしそれを乗り越え、よりしなやかで強固なものを構築してきました。そして今もその歴史の一段階にあります。

病気や怪我で変化した自分を嘆き、元に戻してくれと叫んでも、それは災害前に時を戻してくれ、と言うに等しい理不尽な願いです。前に進むしかありません。今を乗り切り、次に備え、より災害に強い自分を作り出すのです。そうしていく中に、自然からの恵みをたくさん頂くことができ、感謝の心も芽生えます。医療に携わることはそのお手伝いをさせて頂くということです。

自然の摂理への畏怖と感謝は十分かという問いは、太古の昔からの変わらぬ至上命題です。

